遞信省認可

毎月四回發行

いらつめ第四十號目次（明治二十三年一月三十日）

●押　畫…木板畫の押し繪額

●家　政…押し畫作り方第四…………石原一枝孃

畫の繪額

○料理法……………………岩岡芳松

上等料理いり鳥

●文藝美術…日本韻文について學者が工夫すべき箇條

……………………………美妙齋主人

○懸賞文藝應募得點の和歌俳句及び唱歌

題、美人雪夜にそむ

○第五題百詠(其四)…………俊　成　編

●雜　纂…聲を美くする心得‖妙計‖不作法の種

類‖詩人かうばアの言葉‖舊幕府の

頭の監獄……妙…美　齋主人‖日本婦人

‖内閣官報局新定送假名法‖夢の時間

の長さ

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二十九錢郵稅共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵稅共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵稅共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵稅共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六十五錢郵稅共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵稅共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くてハ差上げぬ事●府内に限り無郵稅●毎月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手續きハ郵便小爲替なれば拂渡郵便局さある處に（神田郵便局）さ記し、受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）さ御記入の事●郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り增しなれは妨げ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差し上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第廿八號から本社から賣り出す證さして雜誌の表紙に成美社の旅印と加へましたから是を目標さして御求めと願ひます。旅印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任じません。旅印の無いのと御求に爲っても代金御支拂に及びません

從第三十八號至第四十七號十部版權所有

明治二十三年一月廿九日印刷

明治二十三年一月三十日出版

發行人　山田武太郎
東京市神田區平永町九番地居住

印刷人　佐野忠吉
同市同區同町同番地
成美社方寄留

發行所　成美社
東京市神田區平永町九番地

本號には　押し繪鷹の畫額　日本の韻文について學者が工夫すべき箇條●懸賞文の俳句唱歌及び和歌　美人雪夜　美聲の心得　日本婦人閣送假名法　舊幕府の監獄　夢の時間の長さなどが出て居ます

第四拾號

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

家政

押し繪つくり方（第十八）

石原かずえ

前の貝に出したのが押し繪の額の圖案で、之を張るにはまづ鷹から張るのです。　切れ地は加賀絹か白ぬめがよく、胸腹などは一列に張つて宜しいですが、中羽根からは一枚々々に張るのです。　面倒なら寒冷紗でうら打ちをし、直に用ゐるのです。　成るべく圖よりは少し大きく裁たぬと手際がわるくなります。　其故は羽は段々上へかぶる氣味が有りますから、終りの大尾即ち木から下へ出る羽根は面倒でも一々通例のやうに形紙に貼らなければなりません。

口嘴は上下別々に張り、そして上の嘴は下のへかぶるやうに張るのです。　目の隅の黒い處、及び上の處は臺の形紙へ切れ目を入れ、切りこみのやうに張るのです。　目は丸く穴をあけ、ごく薄い硝子を入れ、瞳孔を作り、裏からはめこむのです。　足は一列に張つて、跡から彩色しても宜しいです。　ぬくめ鳥の腹は白のねりくりで作り、羽はやはり二段までは裏うちの切れ地で宜しいですが、殘りの尾を一枚々々張るのです。　足で握つた方の下羽の細い處はねりくりでなく、絹の切れ地のほごしたのを其儘用ゐて充分です。　また繰りかへし言ひますが、鷹の腹に少し一枚ほど青梅綿を入れると宜しいです。　他の方も同樣です。　木の上の大きな羽根は木の上に是非かぶらせて張るのです。

（以下次號）

衛生料理法（第十）

元鹿鳴館料理方岩間芳松

上等料理の部三十八號よりつゞき

三十二　煎り鳥調理の噺し。　煎り鳥は日本食物中諸人賞味する品にして、良食品です。　調理法に付注意すべきは、消化宜しき野菜類を取合せ、能く柔らかに煮、熟して用ゐれば最上の食品です、又鳥は煮過ぎると第一消化惡しくなり、味を損ずる故、能く調理法心得を見なさい、醬油にて早煮をするのです、少しにても煮過ぎると堅くなります、又普通の煎り鳥の付合せ物の中、蒟蒻を用ゐると例となせども、甚だ消化惡しき物で、滋養分少き物故、衛生を專らにする人は、蒟蒻を用ゐてはなりません。

三十三　煎り鳥調理法。　雁、鴨、家鴨、鷄の類の肉を宜しと致します、肉を適度に切り、醬油に漬け置き、又野菜類は筍、牛房、芋、慈姑、獨活、蓮根、款冬、銀杏、栗、稍隱元の類を宜き程に取合せて切り、よく湯煮をなし、鳥を鍋に入れて胡椒を振り、强火にのせて手早く攪交、八分通り火を通して皿に取り置き、其鍋に牛酪又は脂肪を加へ、又は植物油にても宜し、油に煙の立たるを見て野菜物を入れ、暫時煮て鳥の醬油を加へ、味を付け、八分通り煮ゑたる頃鳥を入れ能く交ぜ、鰹節の薄かきを振り丼又は皿に盛り、粉山椒、木の芽、柚等を細小に切りて掛け出すのです。

猪、鹿の肉類を鳥肉と同じくなすことを宜し、肉に少し紅赤の味噌を裏漉しになして用ゐるのです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文藝美術

日本韻文について學者が工夫すへき箇條

美妙齋主人

日本韻文の起すべきは實に今日に迫りました。 今日に於て文學に志すものは從來專ら行はれた物に致しただけの注意を分けて日本韻文にも置かれたいものです。 元より草創の時代、少なく望んでまづ今直にみるとんやしるれるをば得られぬものゝ、之を作る形を今つくるのは吾々の義務です。

日本の韻文は古から色々な種類になつて出來て居ました。和歌の上から都々逸大津繪の下まで皆一樣に概言すれば韻文です。 或は長歌といひ、或は川柳といひ、其種類を擧げれは二十餘にのぼり、その務めを言へば歌へるものと歌へぬものとの二色にもなりますが、しかし孰れも韻文には違ひ有りません。是れだけの韻文の芽は既に出て居る、それを徒らに隱者散士の娯樂の道具とのみ爲し果てゝ仕舞つたのは洵に惜んでも〳〵餘りのある事、今この文學に志すものゝ稍多くなつた處に於て何うしても之がため向後の方策を運らすべきことです。

で、今の日本韻文はまだ然るべき保護者を得ぬ、とすれば保護を是から與へなければならず、さてそれは何かと言へば彼是そのため學者が工夫されるべき事は品々有ります。

第一 日本韻文の稱呼を定める事

詩、歌などの名義は既に有りますが、意味が各偏頗して居ます。 これを一層充分な名義にすることとこれが一つです。

第二 日本韻文の格式を定める事

五七がいゝか、七五がいゝか、八六がいゝか、七七がいゝか、 其格式がまだ定まつて居ません。

第三 日本韻文の語法を定める事

こゝにいふ語法は用語及び用語法を總括する義で其方針はいつれも從來はの偏頗です。

數ふれば唯この三ケ條だけです。 が、それを定める困難はまた一方ならぬ事です。

○第十回懸賞文藝得點の分

題　美人雪夜に佇む

○俳句

雪の夜や木ぶりの見にぬひめこまつ……石川信子(ミカハ)

一よさにつきゆき花のながめかな……同　上

右評　「ひとよさお」の句、趣向は珍らしいですが、支度が多くかゝり過ぎました。

つねに無きかをりも高しその雪……撫箏女史(ミノ)

右評　「つねに」が「つねは」となり、「高し」が「ゆかし」となつたら一入の風情が出さうに思はれます。

ゆきにでる月もかげゆくをとめかな……生駒うた(ナゴヤ)

右三首いらつめ一部進星

たをやめのなやむは雪かそれよりも……撫箏女史(ミノ)

右一首いらつめ二部進星

そでわかつみねやくるゝを雪のなか……岡田千鶴子(オホサカ)

右一首第三等賞

○和歌

よはにふるゆきも得やらずとやせまし
かくやせましと立てる乙女子……石川のぶ子(ミカハ)

ちりもなき雪にくらべんこゝろかも
はだへあらはにたてるたをやめ……菊のや露女(オホサカ)

うめかをる方をながめてたをやめの
雪にかさぬるつるのけごろも……小山田正夫(ヰブリ)

ふみわけし人のゆくへもしらゆきに
うもれはてゝやひとりたつらむ……同　上

さよふかくゆきふみまよふたをやめに
よしのゝ山のむかしとぞおもふ……目時絹子(イヘ)

ひとしほにつもるとぞ見る乙女子の
かげのうつらふ庭のしらゆき……山本鷲醒(フクサカ)

右八首いらつめ一部進星

ゆき晴れてさへゆく月にたをやめの
まばゆく見ゆるはなのおもかげ……目時絹子(イヘ)

右評　雪月花よみこみなどゝいふ題おは適當の作です

ふる雪をそでおはらひてをとめ子が
たてる心のくらきよはかな……石川のぶ子(ミカヘ)

さよふかくつもれる雪もをとめ子か
こゝろのやみはてらさゞるらむ……………同　上

ゆきのよにはだへあらはにたゝずむは
月にゆるせし花のたをやめ……………菊のや露女(オホサカ)

たをやめの行くもかへるもしらゆきの
こよひはやどれ柴のいほりに…………目時靖子(イヘデ)

右四首第三等賞

行きくれてひとりたゝずむをとめ子の
はなや散らなんゆきのよあらし…菊のや露女(オホサカ)

右準二等賞いらつめ六部進呈

をとめ子がふゞきの夜半に立てるかな
うでのかをりもうめにまがへて…石川のぶ子(ミカハ)

右準壹等賞いらつめ十五部進呈

くさも木もみなかれ果てし雪の夜に
ものいふ花ぞひとり咲きける……山本駑醒(フタチカ)

右壹等賞

○唱歌

夜ふかくつもる白ゆきの　中にーたてるひめこまつ、
心ひくべき人やたれ……………………石川のぶ子(ミカハ)

野路ふきあるゝ小夜あらし、　ちぎりし人はいづくぞと
とふ駒のあともナタそでに　いろたくらべし花ならぬ
雪をみだしてたゞずめる　をとめの身こそあはれなれ。

右…三坂きぬ(サカヒ)

おぼろ月夜にさくらちる　風情と見ねてふるゆきを
ひらひわがせな賂らむと　軒端にかざすはなのそで。

右…藤元あさ(サカヒ)

月はくまなくてりわたり、　枯れ木にむつの花咲けり。
たてるたをやめうれず花、　月、ゆき、はなを併せけり。

右…菊のや露女(オホサカ)

風寒み雪降りつもる夜半の路　行方も更にシラたまの
なみだも凍る身のはてや。　父は逝き、母亦去りし世中な
残るはわれと影ばかり。　かげせし月もまた雲に………
われしもいきは絶ゆべきに…………………………三坂きぬ(サカヒ)

右五曲いらつめ一部進呈

五社百詠（其四）

俊成卿

○早苗

伏見江や淨田の早苗とる田子ハ袖も〇〇〇〇〇〇〇ふつく覧

おほわらきのうき田の早苗生にけり森の下草取なまかへそ

早苗取鳥羽田の面を見渡せはいくゐみあらん田子のをかさよ

種まきし早田のさなへうゑてけりいつ秋風の吹かんとすらん

刈藻かくぬたのこひちに立田子は早苗よりこそほつ成けれ

○照射

ますらをか鹿に心をかけつゝや忍ふの山に夜をあかすらん

夜をかさねともしになつむますらをは鹿を待をや焼盡すらん

雲井まて行く螢かとみにつるは高間の山のともしなりけり

ともしにもしなか鳥をやますらをかねなのは山を分忍ふらん

ますらをか幾夜照射に迷ふらんほくしもしての山はあらし〇

○五月雨

五月雨はおふのみなしら波越てなるもならすもしらぬころ哉

さみたれは岩浪わらふきふね川河社とはこれにそわりける

五月雨は水上まさるいつみ河かさきの山も雲かくれつゝ

有馬やま雲間もみへぬ五月雨に出ゆの末も水まさりけり

五月雨ハなからの山も雲とちてしかのうら船とまくちぬらん

○花橘

雨ののちはなたちはなをふく風に露さへにほふ夕くれのそら

いにしへを忍ふ心をそふるかなみおやの杜に匂ふたちハな

故郷にいかにむかしをしのへとて花たちはなの風に散るらん

住の江にはなたちはなも匂ひけり松もやむかし思ひいつらん

五月こそはなたちはなも匂ひけれ春をくれぬと何惜みけん

○螢

夏虫のはかなき身よりいかにしてひとりをてらす契り有けん

わか玉もあしかれぬへし夏虫のみたらし河にすたくゆふくれ

ともしけつひかりをみるも哀しきやあれにし道の螢なれとも

夏虫のなたの垣やにすたくよはあまの焼火のしけくも有る哉

なかむれはこゝろもつきぬ行螢まとしつかあるゆふくれの空

○蚊遣火

かやり火の煙ばかりや山かつの宿をしらるゝよそめなるらん

哀とを人みよとてもたてさらんけふりさひしき磯のかやかひ

かれつ島かひやにたつる夕けふりしつのしわさも心すみてり

山賤のしわさにも猶いらんとや埴生の小やも蚊遣たてにき

山かつのふせやの庭のかやり火もけふりはおなし雲と成らん

○蓮

夏の日もこゝろの水をすませとや池のはちすに露のすゝしき
野辺にをくおなし露ともみえる哉蓮のうき葉にやとるしら玉
蓮さく池のゆふ風にほふなりうき葉の露はかつこほれつゝ
うき草のすゑより風はふくなれといけの蓮そまつにほひける
蓮さき水さへにほふ夕くれは身とかへてみるこゝちこそすれ

○氷室

冬の後なつもよりこぬ氷室山あきやはしめてときを知るらん
岩かせや松かさきとの氷室山いつれひさしきためしなるらん
春日山ふるき氷室のあとみるもいはのけしきはなほそ涼しき
春も過夏たけぬれとひむろ山ふゆをとゝめてをけるなりけり
冬とちし岩戸あけてもひむろ山あつはとほさぬ関路なりけり

○泉

ましみつの岩もるこゑをよる聞けは枕の下のこゝちこそすれ
ふりにけるおほろの清水結ひあけてむかしの人の心をうくむ
いつくにか夏はよりこぬ山かけやいはもる清水宿しはしかせ
萬代も御法のなかれたえしとや亀井の水の清くすむらん
玉ほこのいしゐのし水手に結ひかくてもなつはすきぬへき哉

○六月祓

けふもたれいすゝの河に祓してあらふるかみもなこし成らん

思ふこと今はみな月はてぬらんみたらし河にみそきしつれは
みそきする麻の立葉の青にきてさはんの神もなひけとそ思ふ
おなしくはなにはの浦に出てこうあらてふことは祓にもせよ
水上に秋や立らんみそき川きたよひなからかせのすゝしき

右最後の歌は續古今集にも出てゐます

○立秋

いつしかと今朝は袂のかろき哉秋はころもにたつにそ有ける
今朝みれはさかのゝ露も色つきてあらしのやまに秋風そ吹く
あきはらや立田のやまの山下風のふもとのさとに告る成けり
須磨の関あきのはつ風越にけりしきつのなみの音もかはれる
あきのくる曉かたとおもふよりやかてつとゆく苔のそてかな

○七夕

たなはたや天河よりかよひけんたれか名つけし星合のそら
七夕の逢夜のうらのふくるにそ秋のこゝろはくたけそめける
天河星合のうらとうつすよりあきはことなるをりとみえけり
七夕のとわたる船のかちの葉にいく秋かきつつゆのたまつさ
契りけん秋のはしめにあまのかはこころもふかし星合のそら

右第四の歌は新古今集にも出てゐます

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜纂

聲を美くする心得(其二)

たとひ天賦の聲ハよし美いにしろ、わるいにしろ、決して人の力で直らぬものとしても猶いくらか工夫も付かぬ事は無いといふ以上ハ必らず早く失望するにも及ばず「及ぶだけ其習練を爲すべき事です。

まづ聲のために苦勞するのは學校に通ふ令娘たちで、一樣に他の諸娘と共に唱歌の稽古を受けるに方り、大きにわが聲を恥かしがります。が、其處です、其處に習練が有るので其唱歌なら唱歌を修めて色々に聲をつかふ、そのはじめに於てまづ聲を濫りに用ゐるのが、得て後までも付きまつハッて少なからぬ害を殘すものです。むかしある笛の達人が其子を戒めて決して冗笛を吹くなと言ッたとの事ですが、さも有るべき事で、目に見ゑぬ氣のぬかりが却つて恐ろしく害をつくります。

聲を練る稽古には最も朝が宜しく、ことに朝飯を終ッてから一時間ばかりの處が最も宜しいです。もしまたいざ聲を練らうとして、其前に針仕事とか、學問とか、すべて氣のつまる事をして居たものならば、それから直に聲の稽古にとりからず、まづ部屋か庭でも散步し、そして少し体操でもして胸を開かせ、かつ血の循環を盛んにして置くに限ります。其時深く息を吸ひ込み、また強く吹き出して肺臟を試る事、この法を二回ばかり試るのも最も宜しい事です。

西洋にまだむまりぶらんと言ッて、有名な歌をうたふ婦人、即ち日本の義太夫かたりといふやふな人が有りましたが此人が高坐へ出る前には必らず今言ッたとほりの息を吸ひ込んだり、ふき出したりする法を一二回試みたとの事です。しかし、言ひ殘しましたが、この息を吸ひ込む事について注意が有ります。即ち深く吸ひ込むにしろ、強く吹き出すにしろ、決して荒く、急に行ふものでは有りません。よく姿勢を正しくして、さて心をしづかにして、最もゆる〳〵と充分に吸ひ込み、また同じやうにしてゆる〳〵と吹き出すので、如何に吸ひ込むがいゝと言ッて、餅が鉄でもぱくりと飲むやうに、剽輕にやッては何にもなりません。

妙計 「火事だ「何處だ「火元だ「馬鹿…「もウ消えさうだ。下火になッた「やアそれは困ッた。燒けて居る內御主人の家へ行んだッけ「いゝさ、それぢや焚き付けて置くさ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

不作法の種類

しきしまや

交際法或は心學、或は禮式の書物に擧げた心得の外に猶世に有る不作法、言ひ換へれば野蠻を離れぬ風習を數へれば中中有ります。 下に列べたのは其あらましで、男女に通じてのぞましくない事です。 政治家や軍人はいざ知らず、古今東西とも名を成した人は悉く皆身を正しく行つた人で、にうとんの閑雅、新井白石の端正は誰も人の知る事です。 世が智育とのみ尙ぶ果ては得て行状に疎くもなりますが、いやしくも一身の完全をのぞむならば誰にもあれ行状にはよく心をつけるべき事です。 要するに人が神の教へに悖かず、少なくも天理に近づくには是非とも心と躰との二つ、この修練を要することで、さもなくて何を苦しんで物數奇にむかしの哲人が心や身体をくるしめましたらう。 心は心のまゝにさせず、体は体のまゝにさせぬ處で、其手綱さばきにより、煩悩とも去り、無上の快樂にも至るのです。 唯その元は勇氣、それだけで、いはゆる宗教はこれがために殆ど設けてあると言つても差し支へありません。 行状、心より猶容易なる身体の制馭さへ出來ぬものが何うして充分の人となれましやうか。 無作法でさしぬけた人は機會に投じただけのことです。

われ〳〵の見聞にふれる不作法、不行状はこれらです。

一、ことさらに磊落をよそほふ似非豪傑。

二、物に頓着せぬ風をして空言を言つて得意とする事

三、眞心から出ぬ言葉と言ふ事。

四、酒を飲むのを自慢にする事。 酒の不德を知つてそれと匿するなら猶格別、人に殆ど豪壯を誇るやうにして飲むのは最も不快です。

以上は一目見て其心ざまの下等、もつとも賤しむべき處が知れる重立つた事。以下は大小取りまぜた不作法、不深切、無慈悲です。

五、猫の好むものを猫の居る處へ出して置いて其猫がそれを食べたと言つて其猫を罰する事。

さすがににうとんは此不德に陷らず、よく事情を考へて犬を取り扱ひました。

六、人の食事の際、けがらしき言を言ひ、或は同じやうな眞似をする事。

七、人の顔色をさとらぬ事。

悟れぬなら愚です。 悟れても悟らぬふりとするなら惡人

です。

八、道を尋ねられてわが知ッただけを委しく答へぬ事

九、食事中に不愉快な感想を起させる事をする事。

十、呼ばれて返事をせぬ事。

十一、目上に對しながら上座にする事。

十二、人の文書を見たがる色をあらはす事。

十三、人の密話、或は他にもらすのを厭ふ様子のある人の話しの時に座を起たぬ事。

十四、人のはなしの腰を折ること。

かぞへ舉げれば際限もありませんが、このくらゐにして置きます。

詩人かうばアの言葉。　詩人かろばアが斯う言ッたことがありました。

「私に媚びる畫工は私の色を白く書き、私を冷かす方は黒く書く。さて私自身が無垢の心をもッて鏡に對してみヅから公平に觀察すればよほど白くも又黒くもない。で、思へば雙方に馬鹿にされたのです」。

實に嘲弄及び阿諛何れも人を馬鹿にした事です。

舊幕府の頃の監獄

美妙齋主人

今日鍛冶橋の監獄なり、其他東京以外の地方の獄屋なり、一覽すれば、其よく諸事整頓したのに駭かぬものは無ささうな事。さらにそれで溯ッて舊幕府の頃のいはゆる牢屋のありさまを考へれば實に雲泥の心持ちがします。　幸にこれまで舊幕府の牢屋の様を古老に聞いたことも有り、また舊記やうの物で見た事もあり、偶然思ひ起ッて、忘れぬ間にと些し書きつらねました。　今の老成の人々には物珍らしくも有りますまいが、われ〳〵と同じ若年のものにはいくらか面白くも思はれましやうか。

德川頃の牢屋は誰も知るとほり江戸の小傳馬町、今高野山の大師や日蓮上人の堂宇のある處にあッた事、主人さへ猶舊の様子の名殘りをば覺えて居ます。　外側に廣い壕をめぐらし、其岸に高さ七尺ばかりの土塀が有りました。　主人が覺えて居る頃は既に今から十二三年の前の事、既に牢屋は無くなッて居ましたが、其取り拂ひ跡は一面の野となッて惡人の足に踏まれた草が生ひ茂ッて居て、土塀は處々やぶれ〳〵ヅれて宛然應仁の皇居を見るやう、壕はいつ浚ッたか分からぬ事とて濃い緑りの大理石でも布いたやうに水草が水の上を封じ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、其間を子供が面白がツて石など投げて穴を明けなどして居る程でした。　其時はまだ主人も子供ながら猶何となく感慨の心持ちもしました。　やれ此處に夜は死靈の聲がするのなんのといふ其近處の人の浮言もほとんど一理あるやうに聞きなされるやう。荒れさびた景色は見て心よくも有りませんでした。
是は主人が見ただけの事。更にむかしの其頃の事を尋ぬるに、外堀から牢屋の奥までには三重の土塀が有つたので、其外から數へて第三番目の土塀の内を内鞘と言ひました。　其内にいはゆる「天下の牢屋」が有つて、ばすちゆとでも言ひさう、まづ此世の地獄のつくりでした。　其中に大牢といふのが有つて、今日いふ巳決未決を論ぜず、はじめは此處に入れて置き、やがてそれ〳〵本牢へ移したのです。　牢はいづれも日光さへよく入らぬ作り、世界の春の影は一點微塵も無く、夏になつても空氣を交換するなどの事も亦有りませんでした。
本牢には牢名主といふものが十二人有りました。　で、此牢名主といふ名義は政府からでも受けるのかと言ふに、決して左樣でなく、中に居る重罪犯のものが相結んで十二人それでみづから勝手に牢の頭となるので、即ち此處に於て言へば重罪犯の者だけ威張れる譯でした！　晝鳶とか、杜騙とか言ふぐらゐの端者は擯斥される方でした。　夫を政府で知つて居たかと言ふに知つては居たのでした。が、默つて看過ぐして居たのでした。
牢名主は牢の中の疊みを殘らず擧げて一つに積み、其上に坐つて居て新參の罪人をくるしめたのです。　此時代の風として、また必要として、牢へ罪人が行けば必らずこの牢名主に賄賂を贈らなければ爲りませんでした。　贈つても其高が少ければ牢へ入つて牢名主に酷く取りあつかはれました。何にしろ、新參の罪人が來ればきめ板といふ板で其罪人を牢名主が打ちました。が、其打ち方は例の賄賂によりました。賄賂の金高が多ければ殆んど打たずに赦しました。　牢名主の餘得は是ばかりで無く、罪人が着て來た衣服をさへ奪つてわが物としました。
その後新參の罪人に對して牢名主が左のとほりの「しやべり」と言ふ方句を言ひわたしました。　其文句の野卑且荒々しいのを見ても獄中に殘酷な空氣が滿ちて居たのがわかります。

（以下次號）

日本婦人（英國雜誌の中抄譯）前號つゞき

日本婦人の鼻ふきは紙で、之を袂へ入れて持ち、一度用ゐれば投げ捨てゝ仕舞ひます。　其傘は英國邊で日本傘といつて賣るものと違つて、油を引いた紙で、極大きく、極重く、通例で文那字で持ち主の名を印刷してあります。　其上等は一本一法即ち三十錢程ですかれらは之を晴雨とも用ゐます。日本人は小兒さへ喫烟する程ゆゑ婦人も亦小さな烟管を持ち國產の烟草すこしをつめ、木炭の火で吸ひつけ、六度ほど吸つて灰をはたきます。　これをばかれらは隙が有れば喜んで常に試みます。

日本婦人は多く可愛らしいですが、不手際に粧ツて天眞の美を却つて損じます。　かれらは艶も無く白く白粉をつけ、眞赤或は紫色な唇に紅をつけます。　夫を持てば眉を落とし齒を染めますが、英明な皇后陛下がこの蠻風を擯斥をされましたから遠からず無くなる事でしやう。　この蠻風はむかし上流社會の夫の嫉妬から起つた事です。

婚禮の式は色々有りますが、まづ仲人といふものが雙方へ周旋して結納といふものを嫁へ送りますが、其品は身分に應じて違ひます。　婚禮の晩には嫁が聟から貰つたものを着て聟の家へ行きます。　婚宴の食物は乾魚（—）、海草、魚の鰭から製したすゥぷ、及び米（—）で、其後で茶と菓子とが出る（—）、これをば日本婦人は其少食なも拘はらず、一般に好みます。

外の食事の時も左樣ですが、此婚宴に於ても物をば箸でたべます。　で、人より早く食べ了るのをば失禮とします。通例日本婦人は早く十五歲で夫を持ちます。　父と兄弟を除く外、其他の人との結婚は自由です。

日本婦人は其子供の時こそ殆んど學問の智識をも得る程の手遊物を持つて遊びますが、大きくなつては遊びも多く持ちません。　まづ有るのは骨牌、將棊で、音樂、舞蹈などは日本婦人の最も愛する處です。　今日その讀む書物は——日本婦人は書物をも愛します——日本固有の書物ですが、今其敎育が恐ろしく速に進む事ゆゑやがて外國の物をも讀むやうになりましやう。　小女の遊びは切り拔き繪で、動物や植物の形をこしらへて遊びます。

貴族の令孃は今歐米へ留學に來ますが、しかし東京には中高尙な女學校が特に多く有つて、職業學校、技術學校、普通學校、高等女學校など有ります。

（未完）

内閣官報局新定送假名法（十九號つゞき）

（一）同音を重ねたるもの

往々　日々　時々　歳々　漸々
處々　方々　區々　偕々　一々
近々　代々　萬々　懇々　的々

（二）同訓ヲ重子タルモノ

抑々　倍々　益々　愈々　彌々
屢々　數々　各々　人々　夫々
次々　會々　偶々　適々　諸々
交々　間々　世々　常々　折々
熟々　與々　稍々

◎接讀詞

接讀詞ニ本然ノモノアリ他詞ヨリ轉シタルモノアリ又數詞相連リタルモノアリ共ニ其數僅少ナルヲ以テ今一々其類ヲ分タス

接讀詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第十八則　又、亦、及ノ三詞及就中、加之等ノ熟字接讀詞ハ總テ送假名ヲ附セス

第十九則　前則外ノ接讀詞ニシテ數詞連合ニアラサルモノハ便宜其語尾一音若クハ數音ヲ寫シテ送假名トス

第二十則　數詞連合ノ接讀詞ハ總テ各品詞本然ノ送假名法ニ從フ

（釋例）

（第一）送假名ヲ附セサル接讀詞　送假名ヲ附セサル接讀詞ニ單字ノモノト熟字ノモノトノ二アリ其例左ノ如シ

又　亦　及
就中　加之　設若　假令　縱令

（第二）送假名ヲ附スヘキ接讀詞　送假名ヲ附スヘキ接讀詞ニ語尾一音ヲ寫スモノト數音ヲ寫スモノトノ二アリ其例左ノ如シ

（一）語尾一音ヲ寫シテ送假名トスルモノ

但シ　若シ　設シ　倘シ　將タ
且ツ　蓋シ　乃チ　即チ　則チ
故ニ　苟モ　縱ヒ　假ヒ　或ハ
雖モ　竝ニ　尋テ　兼テ　而モ

（二）語尾數音ヲ寫シテ送假名トスルモノ

而シテ　而ルニ　然ラハ　然レハ
然ルニ　然レトモ　若クハ　何トナレハ
否ラサレハ

（第三）數詞相連リタル接讀詞　數詞相連リタル接讀詞ハ總テ各品詞本來ノ送假名法ニ從フ其例左ノ如シ

是故ニ　且ツ又　若シ又
然リト雖モ　然ラハ則チ　然リ而シテ
然ルヲ況ヤ　之ニ加フルニ

◎後置詞

後置ニ三種アリ(第一)主格後置詞(第二)賓格後置詞(第三)兩屬後置是ナリ

後置詞ノ送假名ハ左ノ如シ

第二十一則　後置詞ハ元來其性質送假名ニ類スルモノナルカ故ニ三種共ニ總テ假名ニテ之ヲ寫シ別ニ送假名ヲ附セス

(釋例)

(第一)主客後置詞　主格後置詞ハ主位ニ在ル名詞、代名詞又ハ詞勤ノ後ヲ受クルモノナリ其例左ノ如シ

ハ　ガ　ノ　モ　ゾ

ヤ　ヨ　コソ　ヨリ　カラ

(第二)賓格後置詞　賓格後置詞ハ賓位ニ在ル名詞、代名詞又ハ動詞ノ後ヲ受クルモノ其例左ノ如シ

ヲ　ニ　ヘ　ト　マデ

(第三)兩屬後置詞　兩履後置詞ハ主賓兩位ノ後ヲ受クルモノナリ其例左ノ如シ

サヘ　ダニ　スラ　タメ

以上諸語ノ內「ヨリ」「マテ」「タメ」ノ三語ハ往々漢字ニテ　從(ヨリ)　自(ヨリ)　爲(タメ)　爲メ(タメ)ト寫スコトアレトモ此等モ皆假名ニテ寫スヲ可トス

◎咏嘆詞

咏嘆詞ニ二種アリ(第一)漢字ヲ用フルモノ(第二)假名ニテ寫スモノ是ナリ第二種ノ咏嘆詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第二十二則　漢字ヲ用フル咏嘆詞ハ總テ送假名ヲ附セス

第二十三則　假名ニテ寫スモノハ別ニ送假名ヲ附セス

(釋例)

(第一)漢字ヲ用フル咏嘆詞　漢字ヲ用フル咏嘆詞ハ總テ送假名ヲ附セス其例左ノ如シ

嗚呼(アヽ)　吁嗟(アヽ)　噫(アヽ)　嘻(アヽ)

(第二)假名ニテ寫ス咏嘆詞　假名ニテ寫ス咏嘆詞ハ別ニ送假名ノ附スヘキナシ其例左ノ如シ

カナ　ヤ　ヨ　カ

右等ノ咏嘆詞ノ內「カナ」「ヤ」ノ如キハ句調ニ依リテ　哉(カナ)　乎(ヤ)　ト漢字ニテ寫スコトモアルヘケレトモ通常ノ場合ニ於テハ皆假名ニテ寫スヲ可トス

◎音便ノ事

音便トハ口調ニ依リ正音ノ轉シテ他音ト成リタルモノニシテ其種類ハ大概左ノ如シ

第一　キ°ノ音ヨリ流レテイ°トナレルモノ

衝立(ツキタテ)ヲ衝立(ツイタテ)　朔(ツキタチ)ヲ朔(ツイタチ)

築墻(ツキガキ)ヲ築墻(ツイガキ)　刃(ヤキバ)ヲ刃(ヤイバ)

多(オホ°)キヲ多(オホ°)イ　善(ヨ°)キヲ善(ヨ°)イ

抱キテ ヲ 抱イテ　叩キテ ヲ 叩イテ
説キテ ヲ 説イテ

此等ノ詞ハ其名詞ナルモノハ通常其音便ノ儘ニ傍假字ヲ寫スト雖モ其他ハ概子皆正則ナル變化ニ從ヒテ之ヲ寫スヲ可トス尤モ純然タル和文物語文體ニ於テハ音便ノ儘ニテ之ヲ寫スモ妨ナシ

第二　クノ音ヨリ流レテウトナリタルモノ

長クシテ ヲ 長ウシテ　同ジクシテ ヲ 同ジウシテ
重クシテ ヲ 重ウシテ　宜シクシテ ヲ 宜シウシテ

此等モ純然タル和文ノ外ハ正法ニ從ヒテ寫スヲ可トス

第三。　チヲ轉シテツト呼フモノ

立チテ ヲ 立ッテ　持チテ ヲ 持ッテ

（以下次號）

夢の時間の長さ

夢といふものは短くもあり、長くもあり、色々な事もあらはれる。其色々な事の起つて實際その夢を見る人には長く感ぜられるものゝ、果たして其夢の時間がさう有るものか、どうか、まだ實驗した者も無い事たて今日に至るまで知れず、現に近頃獨逸では之がため學者間にかれ是臆説が出て、隨分爭論も喧ましくありました。―が、此頃しよるつ博士の實驗によつて今までの曖昧が全く無くなりました。　今しよるつ氏の實驗した顛末を載せましやう。

「不愉快でも無い事ながら劇しく身体をも、心をも勞して後、時計をまいて卓子の上に置き、私（しるよつ氏）は眠りにつきました。　側には洋燈もついて居ました。　直に見れば、私は何でもよく知つて居る舟に乘つて海へ出ました。私はふたゝび若くなつて、そして遠見をしました。　水の音も聞え、金色の雲が私のまはりに浮かみました。　何時間其處に私が居たかは覺えません。が、長いやうでした。　其内に景色が變はりました。　私は田舍に居て、前になくなつた兩親が來て喜んで逢ひました。兩親につれられて寺へ行き、聞けばおるがんの音が高く聞えました。　私は喜ぶ、同時に驚いたのは其處に私の妻子が居たことでした。　宣教師は演檀に登つて說教しましたが、何と言つたか、おるがんの音にかき消されて分かりませんでした。　私は息子の手を引いて寺の塔にのぼりました。が、再び景色がかはりました。いつか私の息子は居なくなつて、舊知つて居て、而も以前に死んだ士官に逢ひました。で、此處は戰場で、私は外科醫者と

なつたやうてした。この士官の年齡が見たところ非常にわかい、それが不思議と思つて居る內に俄に大砲の音がしました。驚いて目が覺めて、見れば其音は誰か來て部屋の戶を開けた、その戶の音でした。思へば夢に見た間の出來事についで考へれば、頗る久しく居たやうでした。が、夫れで机に置いた時計を見れば、眠りについてから一分時間より多くは過ぎて居ませんでした——一分時間、夫の夢の顚末を語るより猶みじかい時間でした」。

記者にも一度これと同じやうな經驗が有りました。實際それに違ひ無いにしろ、實に思へば夢の敏捷自由なのは驚くばかりで、隨つてわれ〳〵の精神の靈妙なのがいよ〳〵不思議とも何とも言ひやうの無い程です。

○懸賞文藝新題

○第十一回題（何でもよし）
右　難破船の圖題。　一月二十日〆切

○第十二回題（何でもよし）
右　處女の愛情。　二月十日〆切

○第十三回題（唱歌淨瑠璃及び文章に限る）
右　桃花　二月二十日〆切

○第十四回題（文章）
右　春月　三月十日〆切

○第十五回題（唱歌）
右　こぞの燕　三月十日〆切

○第十六回題（和歌唱歌俳句及び文章）
右　春の空　三月二十日〆切

○第十七回題（何でもよし）
右　雨中に櫻を折る　三月二十日〆切

○第十八回題（何でもよし）
右　いとまごひ　四月十日〆切

右文藝應募者心得

第一　題を種にして成るべく趣向を立てるのを尙ぶ事○第二　唱歌淨瑠璃及び文章は各一千五百字以內の事○第三　一人で二種類の作を投せられた人は一種類各別々の紙に書く事○第四　原稿には宿所性名明記の事○第五　原稿ハ半紙に限る事○第六　第二第三第四及び第五に背くものは沒書。賞品は等一賞清親艮信二氏の內御好みの**肉筆着色絹**地書畫家の手ゟ成つた書帖だけの大さの一面○二等いらつめ十二部○三等三部。

廣告

通信女學發兌廣告

一年で女の心得になる學問を手易く敎授し家に居て用事の暇まく〳〵に稽古の出來る樣に仕組たるものにて文章は誰れも讀める程にやさしく其上尙ほ分らぬ時ハ手紙にて質問の出來る樣に致し、毎月一冊發兌し左の諸科目を敎授す

家政學、作文法、和學、漢學、英學、萬國史、日本歷史、算盤、理化學、生理學、動植學、歌詠方、圖入地理、英學

敎師ハ醫學士三島通良、鈴木弘恭、木村祐吉、其他重もれ明治女學校の敎員諸君に委賴し專ら親切鄭寧を主意とす○一冊二百頁にて一年二千五百頁となる之にて女子一と通りの學問を悉とく敎授し年末紙上試驗を行ひ及第する者には女學雜誌社通信女學部卒業證を寄す○一年の計は春に在去一ヶ年の徒らに過しことを思へば此一年是非とも心掛けて普通女學を修業する事肝要なり夫には一月最初の分より購讀せねば中途にて心付くとも既に遲し●一冊三十二錢ふて全國郵稅なし半年分前金一圓八十錢同一年分三圓五十錢、女學雜誌と合せ購讀する者には各一割づゝ減ず○毎月十日發兌○

麴町區富士見町二丁目

女學雜誌社

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

米國新製絨氈維氈塵去り器械

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

堅牢無比、便利一等、切地を損せずに秋毫の垢埃をも去る器械○貴紳の住宅に最も必要の品○一個四圓五十錢

專賣　神田區通鍋町十番地　**高木商店**

いらつめ

合本

明治廿二年十、十一月分○紙數百二十六頁○價郵稅共十七錢五厘○廿八號ゟ卅三號迄揃ひ○明治廿二年十二月分○紙數八十四頁○價郵稅共十二錢○いづれも府內は無郵稅

右十二月分合本は一月十二日から發賣○郵劵代用は五厘切手で一割まし限る。

眞理　第四號

毎月一回廿日發行

一月廿日發兌

眞理●政治熱をして宗教世界を●殺せしむる勿れ●ダルウヰン學說と哲學的終局論の關係●奇蹟論●福音書評論の法如何◉雜錄●小日向切支丹屋敷及岡本三右衛門墓の事窓書入●蟹の母親第三●女房の不經濟◉文園●數件◉雜報●春餅●消防夫の出初式●電光一閃●珍書展覽會●新聞の無休刊●明治廿三年●然れとも●日曜學校の春●何の日か宗派心を一掃せんか●今日尙ほ●敢てアルノルド氏に質す●曼帝德行余聞●在英日本人の演說

◉一冊八錢半年前金四十錢一年八十錢●全國無遞送料●見本は五厘切手十七枚

發行所　東京駿河台鈴木町　**世光社**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

額面書附録の豫告

二月八日發兌いらつめ第四十一號には
狩野良信氏の鳩の圖（色刷石版）

二月十五日發兌いらつめ第四十二號には
米國はくヱッと氏の「浮世の苦しみ」といふ圖

●右何れも額面に成るやう作ッた物故通常のいらつめの挿畫より二倍以上の大きさです

はくヱッと氏の圖様ハ三漁夫が一葉の小舟に乘つて暴浪狂風の内に魚を捕る圖で是も亦石版密畫です漁夫の苦心の顏色体格網の中に蹈つて居る魚の影など洵に非凡の出來です

日本畫の秀逸は追々之を版にして廣く世に公にしますが西洋畫に至つてはもつとも少い方です夫故是から弊社に於て重に洋人の筆にかゝる有名の畫は次第に順を追つて出版し西洋畫の珍らしい處をも讀者の御覽に入れる心得で今度のはくヱッと氏の畫も其一着歩で猶時としては其間らふヱるなどの秀逸も載せます

成美社

印刷所　東京神田區松下町十三番地　熊田活版所